

No.	構成員意見等	回答(案)
1	夏期確認個体数削減目標を達成し、R1年被害額も見かけ上大幅減となっています。資料1では、モニタリングしていきなっていますが、早急に分析・評価しておく必要があると思います。管理計画の成功とするか、目標の見直しが必要な状況なのか議論が必要と考えます。冬期個体数も減っていますので、取り返しが付かない状況になる前に捕獲計画の継続・妥当性等検討すべきではないでしょうか。 (資料1、2)	専門家の意見を伺いながら検討していきます。
2	地域によってはアザラシが増えているところもあります(声間、ベンサシ沖など)。このような意見と確認個体数の推移との乖離がみられる原因は何があるでしょうか。 (資料1)	稚内市声間では目視による個体数調査ができておらず、礼文島ベンサシ沖では目視による調査回数が少ないことから、今後、調査精度向上のためのモニタリング体制の構築について、専門家の意見を伺いながら検討していきます。
3	R2の越夏個体数は目標値であった700頭を下回ったが、この結果に関して「野外調査(定点カメラ維持業務など)が充分に行えなかった」といったコロナ禍の影響はあったのか。 (資料1(表1、図2))	目視調査や定点カメラによる調査は例年どおり実施しており、新型コロナウイルス感染症の感染拡大による個体数調査への影響はないと考えています。
4	上記と関連するが資料1.2(1)の書き振り(P1最終行)では十分なモニタリングが実施できていないように読み取れるが、単に継続期間が短いだけなのか、それとも更なる調査努力量の投入が必要なのか、また後者の場合どのような改善策があつてそれは可能なのかを御教示いただきたい。	個体数調査は定点カメラと目視により実施していますが、目視による調査地点は調査回数が少ないため、今後定点カメラの設置や調査回数の増加等、調査精度向上のためモニタリング体制の構築を検討していきます。
5	管理目標であった越夏個体数削減を達成し被害額も対前年比で50%を下回っている点から、管理計画は現状で順調に進捗していると評価して良いと考える。 (資料1(表2、図3))	(意見に付き回答なし)
6	現場での聞き取り結果は断片的なエピソードとなってしまいがちだが、このように総覧可能な形にまとめて戴き感謝する。全体的にはサケ定置の被害が顕著なようだが、そこに重点的な対策(例:格子網の導入補助)を打つことは検討できないだろうか(新年度あるいは次管理期で)。アザラシの個体数は変動するものなので、採捕圧の増加一辺倒ではいずれ対応できない局面を迎えるだろう。 (資料1(表8~9))	格子網の設置等、物理的な防除対策については専門家の意見を伺いながら検討していきます。
7	管理対象とする個体群の空間的広がりや全個体数が依然不明のままである点は見逃ごせない。対象海域の大部分がロシア水域であるため個体数調査は実施困難だが、来遊群の分布については東京農大が取得し一部論文にて公表済みの衛星発信器装着による追跡結果およびmtDNA解析結果からある程度の記述は可能ではないか。遅くとも次期管理計画策定時までには知見の整理をお願いしたい。 (資料5)	専門家の意見を伺いながら検討していきますが、mtDNAについてはデータ収集数が少なく、記述は難しいと考えています。